

道具とのふれあい

「東大寺を建てたのは誰ですか」という問題に「聖武天皇です」と言うと、「正解は大工さんです」という類のクイズが流行したことがあります。

「聖武天皇」が正しいのですが、「大工さん」も笑い話として終わらせたくない答えです。

実際にその現場で汗を流し、知恵を絞って東大寺を建てた大工さんの工夫や苦勞に焦点を当てた見方をすると歴史がもっと身近になると思います。

そのような視点で子どもたちを相手に、ちよつとした一時を過ごしてみませんか。

道具の仕組みを考えて道具を使うことは、私たちの生活では当たり前のことですが、遊び方も変わり、お手伝いも少なくなってきた子どもたちは、道具を使いながら不思議な発見ができるので。

○鋏・備中

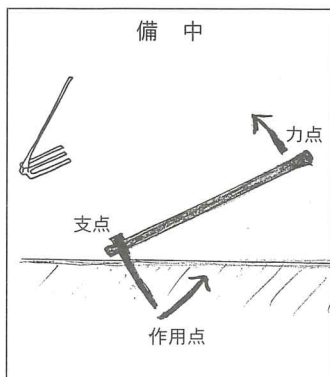
備中や鋏は、田舎で生活する子どもたちには身近な道具で、使ったことがある子どもも多いと思います。でも、①打つ、②起こす、③返す、の動作を意識して使っている子は少ないと思います。

まず、備中を振り上げ、田畑に打ち込む(打つ)。次に、柄と刃の付け根を支点にし、柄の手前を上げて土を起こす(起こす)。そして、起こした部分の土を引

いて、土の固まりを裏返す(返す)。この動作の繰り返しで田畑を耕すのです。

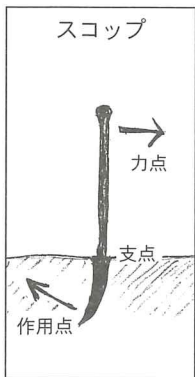
この一連の動きは「この原理」の繰り返しです。柄と刃の付け根が支点となつて、刃が作用点、力点が柄を動かす部分です。鋏や備中を振り上げる時にも両手を上手に使って「この原理」を応用しています。

「この原理」が働いているかいないかで作業効率も労力も大きく変わります。



○スコップ

スコップも「この原理」を応用して使う道具です。地面にグイと挿し、取っ手を手前に倒してすくい上げる。刃と柄の分かれ目が支点となつて土を掘り起こす仕組みです。



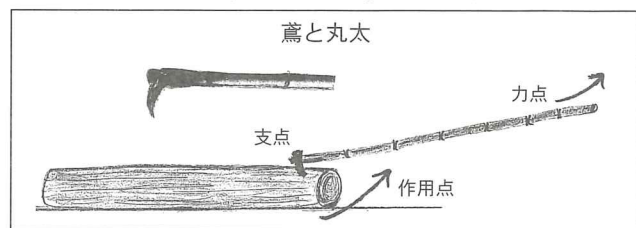
土をすくう時も右手と左手の間隔を広げて柄を持つと、この作用が大きくなり、少ない力ですくい上げることが出来ます。

○丸太と鳶

近頃は、鳶を使うことはあまりありません。機会を作つて、是非一度体験してみてください。丸太を一人で動かす時、鳶を使うと使わないのでは仕事量が大きく違います。あんなに重い丸太がこんなにも軽く動くのかと驚かされます。

鳶を使うと、重くて長くて不安定な丸太

が軽い力で動くので事故が多く、使用上の注意点も多く、熟練した職人技が必要な道具です。初めて体験する場合は平地で行うと安全です。



鳶も「この原理」が応用された道具です。子どもたちと一緒に支点・力点・作用点を確かめながら体験してみましよう。

支点と力点との間隔となる鳶の柄はとても長く、作用点に大きな力がかかるので、柄が折れないように、曲げる力に強い竹

の竿が使われています。

「こ」は多くの生活場面で応用されています。ジャッキ、水門の開閉、栓抜き、錐(きり)、はさみ、ペンチ、スパナ、ドライバー、石臼の柄、水車等々。数えるといくつも出てきますね。まだまだ道具の不思議は沢山あります。

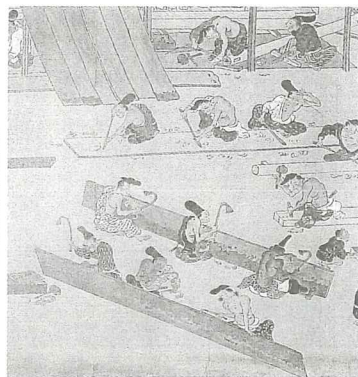
「鉋」の刃が二枚なのは何故でしょう。

「げんのう」の鉋の部分をよく見ると、一方は膨らんでいて、もう一方は平面です。何故違いがあるのでしょうか。

「両刃の鉋」の縦引きと横引きはどう違うのでしょうか。

「両刃の鉋」の刃の厚さは、柄に近い方が厚く、先の方が薄いのは何故でしょう。

道具の不思議を調べ、道具を作った人や使った人々の知恵と汗と心にふれあい、子どもたちと一緒に楽しんでみませんか。



鎌倉時代末期
「春日権現験記絵」より

(設楽町文化財保護審議会委員
加藤 紘市)